

雪椿通信

新潟県立近代美術館だより
Spring & Summer 2017 NOME

vol.48

2017年度
前半期の
企画展

徳永前館長の後任として4月に就任いたしました。よろしくお願ひします。新潟日報社で編集委員などを務めたのち、新潟日報の関連会社にしばらくおりまして、このほど当美術館で仕事をさせていただくことになりました。

編集委員時代、本県が生んだ日本画の大家で文化勲章を受章した小林古径さんの取材のため東京藝術大学長だった平山郁夫先生の学長室にお訪ねし、特集記事を書かせてもらったことがあります、美術との関わりがそれほど深いわけではありません。徳永前館長には無論、及ぶべくありませんが、少しでも追いつくよう一生懸命に勉強したいと思っています。ご指導のほど、心からお願ひ申し上げます。

待ちに待った春本番となりました。4月29日から6月11日まで、「漢字三千年—漢字の歴史と美—」を開催いたします。日本で初めて、といつていい「漢字」をテーマにした展覧会です。はるか三千年の昔、中国文明のなかで生まれた古代文字は以来、人々に愛され使われ続けています。会場では最古の漢字といわれる甲骨文字をはじめ、文字の統一を果たした秦時代の漢字、世界初公開となる文字が刻まれた兵馬俑、漢字を芸術の域にまで高めた王羲之や顏真卿の拓本など歴代の名書作品を展示します。並ぶ名品は中国の国家一級文物（国宝）

21点を含む約110点に上ります。漢字の歴史と美の変遷、漢字にまつわるエピソード

も紹介し、これまでに例を見ない漢字ワールドをお楽しみいただきます。

「漢字三千年」閉幕からひと月もたたない7月8日から8月27日まで、「加山又造展 生命の煌めき」を開催します。戦後日本画の革新をリードする旗手として活躍した加山又造（1927-2004年）は、京都西陣の和装図案を生業とする家に生まれました。日本画の伝統的な意匠や様式を鋭い感性で現代に甦らせ、華麗な装飾美による屏風絵ばかりでなく斬新な裸婦にも挑戦しました。創作意欲は絵画のみにとどまらず、陶器や着物の絵付けにも及びました。1997年に文化功労者、2003年には文化勲章を受章しました。加山又造生誕90周年に当たる2017年、これを記念して初期から晩年に至る作品を、4つの章立てで辿り、生命感あふれる美しく華麗な日本画の世界へと誘います。新潟展では特別企画として、長岡市の駒形十吉記念美術館と連携し2つの会場でお楽しみいただることになりました。



加山又造《淡月》1996年 郷さくら美術館蔵（8/6まで展示）

漢字三千年 漢字の歴史と美に浸る…

中国文化の精髄。中国文明のタイムカプセル。芸術の域にまで高められたフォルム。展示されている漢字の作品を形容する言葉です。そして、世界初公開となる文字の刻まれた兵馬俑。それは圧倒的な存在感をもって私たちに迫ってきます。まるで、三千年分の時空を旅しているかのような作品・資料の数々。

ぜひ、御来館いただき本物が放つエネルギーをその身体で受け取ってください。お待ちしております。

（学芸課長代理 宇賀田和雄）

《鎧甲武士陶俑(がいこうぶしどうよう)(部分)
秦時代 秦始皇帝陵博物院 ○一級文物



鄧石如《隸書“世慮全消”（“せりよぜんしょう”）》
清時代 安徽博物院 ○一級文物

漢字三千年—漢字と歴史の美—
会期 4月29日(土・祝)～6月11日(日)

生誕90年 加山又造展

いのち きら
生命の煌めき

会期：7月8日(土)～8月27日(日)

加山又造を御存じですか？当館では所蔵品《月と駱駝》が名品としておなじみですが、一般的には、日本の伝統的絵画を基盤とした華麗で装飾的な表現で知られているかもしれません。

加山の日本画家としてのスタートは、戦後、日本画を含む伝統的文化の価値が疑問視され、危機に直面している時でした。加山は、新しい日本画を探るべく、西欧の様々な表現を貪欲に吸収し、動物をモチーフに独自の表現を構築しました。その後は、日本の大和絵や琳派の意匠を再構築し大胆に翻案した作品、華麗な裸婦、厳



《猫》1980年頃 個人蔵

《紅白梅》1965年 個人蔵(8/6まで展示)



格な水墨画の大画面、と、次々に新しい主題を見出し、展開していきます。それぞれの表現に一貫して流れているのは、華麗な装飾性とクールでシャープなダイナミズムであるといえるでしょう。

この展覧会では、加山の初期から晩年までの作品を四つの章に分け、第1章では索漠とした背景に描かれるデフォルメされた動物を、第2章では伝統絵画の可能性を再発見し、装飾的なモチーフを再構成した作品、第3章ではファッショナブルな姿態の裸婦や小動物を描いた作品、そして第4章では、日本や中国の巨匠や山水画に学び築き上げた独創的で現代的な水墨画の世界を紹介します。加山が制作の傍ら積極的に挑んだ陶磁器や染織への絵付けや版画もご覧いただきます。

京都西陣の衣装図案家の家に生まれた加山は、西洋美術を吸収しながらもやがては日本の伝統に可能性を見出し、これを大胆に翻案し現代に甦らせました。華麗な世界をお楽しみください。

(学芸課長代理 宮下東子)

私とこの1点

木下晋《101年の胎動》



木下晋《101年の胎動》2001年 当館蔵

白と黒。強烈な存在感を放つ鉛筆画、《101年の胎動》は越後の伝統芸能であった瞽女（ごぜ）の小林ハルを描いた作品です。元々瞽女について調べていた時に、当館に運良く展示されていたのがこの作品との出会いでした。

私はコレクション展「静かなるもの」にて初めて展示を担当しました。題を聞いてすぐに本作の展示を考えました。キャッシュ作成、展示の指示、解説、そもそも“静かなるもの”とは何か？…美術館側に立つことは何もかもが新鮮で大変でした。本作については展示位置に苦戦しました。付近に彫刻作品の展示があり、重なると鑑賞の妨げに、離すと他の作品を鑑賞中のお客様同士で衝突してしまう可能性もあり、頭で考えること

とと実際に試すことは違うことを痛感しました。

初めての展示は苦労ばかりではありません。会期中に作者の木下晋氏が来館されました。写真はその時のものです。緊張した姿がお恥ずかしい…。解説会やアンケートにてお客様の反応を知ることができたことも良い経験になりました。

さて本作のモデル、小林ハルは目の見えない女性です。木下氏は彼女の話から色彩を感じたと語っており、白と黒の中にも色彩を感じ取ることができます。この色彩や強調された皺からは彼女の深い経験や人生がうかがえます。

今回の経験は私にとってかけがえのないものとなりました。この経験は皺となり私にも刻まれていくでしょう。皺が深い人間になつたとき、またこの作品とまみえることが私の目標です。



(元職員 渡邊一麦)

新収蔵作品紹介

平成28年度、当館では27点の作品を新たに収蔵しました。一部を除き、コレクション展第1期「新収蔵品を中心」(2017年3月24日～6月18日)にてお披露目しています。多彩な新収蔵品の中から3点を担当学芸員がご紹介いたします。

広川松五郎

『襖絵紅梅図(光琳梗概図)』

広川松五郎は新潟県三条市に生まれ、東京美術学校图案科を卒業後、同窓であり盟友でもあった金工作家・高村豊周とともに、革新的工芸家集団「无型」や「実在工芸美術会」を立ち上げ、東京藝術大学工芸科教授、日展参事を務めるなど、戦前から一貫して近代工芸の確立に尽力、染織家として日本の工芸界隆盛の一翼を担いました。当館では2000年春に「広川松五郎・高村豊周展」を開催、本展を機会に収集も考えましたが、当時は購入できる作品がなく、2004年度からは収集予算もなくなり、収集の機会は潰えたかと思われました。それが一転、当館の展覧会から17年を経た今年、広川作品6点をご寄贈頂けることになりました。これらは全て展覧会で紹介した作品群であり、中でも尾形光琳を主題にした《襖絵紅梅図》は戦後の広川松五郎の代表作です。紅梅を大胆に直線的に描きながらも、麻地の素材が紅梅の質感をより鮮やかに感じさせます。裏面は対照的に、季節感溢れる様々な植物が情緒豊かに表現されています。寄贈に至る経緯の中では、当館での展覧会開催が大きなきっかけになったとのことで、その意味でも、美術館冥利に尽くる結果となりました。

(学芸課長 藤田裕彦)



広川松五郎《襖絵紅梅図(光琳梗概図)》昭和21年頃 麻地・染織4枚組 当館蔵



戸張公正《TORSO》1990年頃 ブロンズ 当館蔵

戸張公正

『TORSO』

しんと静まりかえりながら、どこか主張する作品です。

作家の戸張公正氏は、トルソを中心制作する、トルソの作家としてよく知られています。姿勢も表情もなく、ただ人間の胴体だけで表されるトルソは、単純ゆえに、それだけで作家性を密度高く表現するのは難解な題材もあります。

戸張氏は長年この難しいテーマと対峙し続けてきました。その追求の中で素材もセメント、アルミ、ブロンズ…と多様に変化し、形態も初期の具象から、肉体表現を過剰に削ぎ落とした抽象的トルソへと移り変わっていきます。この《TORSO》は、戸張氏が抽象化を経てまた具象へと回帰していった90年代の作例です。無駄のない明快な形態で表された女性の胴体は、わずかに身をよじらせ、内にある生命が時を止められたように見えます。また、洗練されたフォルムは、遙か昔から存在し続けていたような、超然とした雰囲気さえも放っています。

内から語りかけてくるような作品の先に、その内面を探り続けた作家の精神が浮かび上がってくるようです。

(主任学芸員 伊澤朋美)

アンリ・オットマン

『屏風の前の裸婦』

まぶしいほどの白い肌をした裸婦が、鮮やかなグリーンのシーツの上で気持ちよさそうに寝ています。重そうな房のたれた派手なクッションや、東洋風の屏風を広げた室内の様子をみると、庶民のつましい生活を描いたものではないことは明らかです。おそらくは富裕な男性が出入りする娼館の一室あたりではないでしょうか。眺めていると香水の匂いにむせ返ってしまいそうです。このように、異国情緒の漂う空間にいる裸婦を描くことは、西洋では19世紀のロマン派以降つづく伝統的な主題でした。遠い国の出来事というフィルターをかけると、女性がさらに美しくなることを知っていたからでしょう。

作者のアンリ・オットマンは、フランス中西部の町アンヌイに生まれ、ベルギーのブリュッセルやパリで活動した画家です。風景画から静物画まで幅広い画題をこなしましたが、最も得意としたのは裸体画でした。裸婦像の名手としてルノワールのことを尊敬していたといいます。現在はあまりその名前を聞くことはありませんが、1920年代当時は人気があり、あの旧松方コレクションにもオットマンの作品が含まれていました。



アンリ・オットマン《屏風の前の裸婦》1920年頃 油彩、キャンバス 当館蔵

(学芸課長代理 平石昌子)

退任のご挨拶

前館長 德永 健一



「こちらでやっても良いよ」平成22年3月のある日、新潟市の課長に電話をした。彼は今でも“命拾いをした”と言っています。「奈良の古寺と仏像展」を引き受けた始まりです。新潟市美術館で2月に発生した“カビクモ事件”により、神林恒道會津八一記念館館長が精力的に準備を進めていた、「奈良の古寺と仏像展」の同館での4月開催に文化庁から待ったがかかりました。新潟市と文化庁の数度の協議で、文化庁の担当課長から「公開承認施設の県立近代美術館がありますよ」と示唆があり、本庁からも新潟市長の要請を知事が内諾したと伝えられました。

“カビクモ事件”とは、新潟市美術館の現代美術の土製作品に空調が不十分でカビが発生したことと、展示物にクモが卵を産み付けていたことなどが、事件としてメディアに大きく取り上げられ、文化庁としても新潟市美術館で重文・国宝展示を認めることができない状況となっていました。今振り返れば現場できちんと処置をして、本庁に報

告しメディアに説明すれば何も問題が起きなかつたはず。組織内の危機管理、情報共有と連絡責任体制は我われも教訓としなければなりません。

この年度の最初の企画展は、4月10日から5月30日まで「日本の自画像・写真が描く戦後」が決まっていました、それをコレクション展示場に移して“仏像”を押し込む荒業、おかげで良い写真展にも拘らず観覧者は3,890人と残念な結果に終わりました。一方「奈良の古寺と仏像展」は“カビクモ事件”として全国的に話題となり、近隣各県からもお客様が来られ、新潟市からは臨時バスも出て、平成22年4月24日から41日間で13万523人の大記録となりました。とくに国宝の中宮寺菩薩半跏像が展示された後半は人ひとひとの行列になり、一日平均入場者3,183人の記録はいまだ破られていません。玄関わきには急遽仮設トイレ、臨時券売所なども設けられ、その盛況ぶりはいまだ語り継がれ、近代美術館の存在が県民に認められステータスにもなっています。

時代は大きく動いています。少子高齢化、人口減少、公共交通の課題など近代美術館を取り巻く環境はますます厳しくなっています。建設当時の県人口は248万人、2030年にはそれが200万人を割ろうとしています。今年から義務教育現場でITネット美術教育が試行されます。本物を見せ、本物の持つ感動をどう伝えられるか、美術館の価値を問われる時代になったと思います。9年間大変お世話になりました。

近美のおすすめ

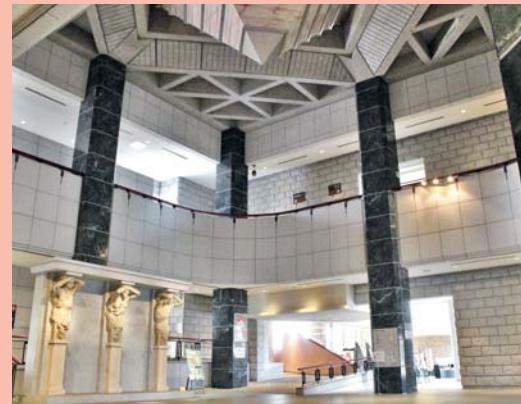
KINBI no
OSUSUME

私がおすすめしたい1つが、入口を入って最初にお客様をお迎えするエントランスホールです。入った瞬間にどこなく凜とした空気を感じる広々とした空間、正面のオーギュスト・ロダンの彫刻《カリアティード

とアトランティ》。その素晴らしいしさには、しばし目がくぎづけになるほどです。そして、天井を見上げるとまるでピラミッドを逆さまにしたような神秘的な形にも思わず見入ってしまいます。なにか、いつもと違う時間の中にいるような不思議な感覚になります。

展覧会においてになられた方だけでなく、ちょっとお立寄りいただいた方も、もしかしたら、エントランスホールそのものが、大きな作品の1つのように、感じていただけるかもしれません。

(嘱託員 深井尚子)



お世話になつてます

シリーズ
その10

コピー機



昨年の10月に新しいコピー機が近代美術館にやってきました。コピーはもちろんのこと、ファックス機能やスキャン機能が以前のものよりパワーアップしました。パソコンと接続されてるので、カラー印刷もできます。どこの職場にもコピー機はありますが、美術館のコピー機は業務をいろいろとサポートしてくれる頼りになる存在です。 (総務課主査 萩木晃)

編集部からのひとこと

毎年恒例となったNIIGATAアートリンクのスタンプラリーが今年も実施中です。前半期の近美では、漢字三千年と加山又造展が対象になっています。各館のスケジュールが一覧できるスタンプラリー用紙は、鑑賞の記録にもご活用いただけます。美術館巡りのお供にオススメです!

(美術学芸員 松本奈穂子)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第48号

編集・発行

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14

TEL0258-28-4111㈹ FAX0258-28-4115

<http://kinbi.pref.niigata.lg.jp/> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷

株式会社 山田写真製版所

〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14

発 行 日

2017年4月28日